

「簡易宿泊施設（ドヤ）のバックパッカーへの開放と文化の摩擦」

藤田智博（人間科学研究科）

tomo\_travelin@hotmail.com

<はじめに（本報告の目的）>

- ・山谷と釜ヶ崎で行った調査の背景・問題意識・結果・考察・インプリケーションの報告

<本調査の概要>

- ・山谷と釜ヶ崎にてバックパッカー向けに開放されているドヤにて従業員・利用者に聞き取り調査

<本調査の背景>

- ・ドヤ街にバックパッカーがやってきているという都市下層社会の変化

<本調査の背景にある問題意識>

社会学は伝統的に都市下層社会を研究の対象としてきたが、近年の都市下層社会の変化は、マクロな社会変動を何か反映しているのか？（山谷、釜ヶ崎、寿町といった日本を代表するドヤ街すべてにおいて、時期的な相違はあれバックパッカーがやってきていることをどのように考えたらよいのか？） マクロ社会理論的関心

（例） 生産（労働者の宿）から消費（ツーリストの宿）へ？

グローバリゼーション？

ドヤ街にバックパッカーが「やってきている」という実際の変化の位相と「バックパッカーがやってきているドヤ街」という表象の次元での位相の連関と影響はどのようなものか？ 異文化表象論的関心

（例） 「バックパッカーの街」イメージへ誘惑される人の存在？

バックパッカーはどこからやってきているのか、また、それはどのような経緯で、そこでコミュニケーションをはじめとするコンフリクトは存在しないのか？ 記述的関心

（例） アジア圏から（韓国、中国、台湾）？

<ドヤ街成立の歴史的背景 釜ヶ崎を事例に> （加藤 2002）

- ・1900年代の都市政策が複雑に絡み合う中で創出（きわめて人為的なプロセス）

「木賃宿街」という景観の誕生

<調査結果・解釈> （聞き取り・観察を通して）山谷を事例として

ドヤがバックパッカーに開放された要因

・90年代前半以降(バブル崩壊後)簡易宿泊施設への宿泊者の減少とそれに伴う客層の変化  
ドヤ街への求人方式の変化という要因、2002年W杯契機説のウソ cf. 寿町

ドヤにおけるバックパッカーのコミュニケーション空間(当日は図を記述する)

・圧倒的多数を占めていたのは、フランス・ドイツ出身のバックパッカー

ドヤ表象をめぐるコンフリクトとドヤ表象をめぐる三つの位相

・簡易宿泊施設で働く日本人従業員の従業動機と異文化体験の連関

・「ドヤ街」へのあるテレビ番組取材におけるテレビ制作側側のステレオタイプカルな要求  
例 取材時、フランス人宿泊者へ英語を話すことを強要。ドヤの「バックパッカー化」  
2002年日韓W杯契機説の強要など……。cf.(飯田・原 2005)

・そして、それを記述する研究者・報告者である<私> 「メディアーター」?

<本調査のインプリケーション>

・異文化表象をめぐる問題系における「生活環境主義」(古川・松田 2003)的立場のある  
一定程度の意義の確認およびその適用範囲の拡大の可能性(すなわち、地域文化や伝統  
文化へのまなざしのみならず、<都市的なもの>へのまなざしへも適用可能?)  
異文化表象がはらむ問題の次元を区別することができる(ただし、異文化表  
象がはらむ問題提起そのものは、なお正しい?)

<文献>

加藤政洋, 2002, 『大阪のスラムと盛り場 近代都市と場所の系譜学』創元社.

飯田卓・原知章, 2005, 『電子メディアを飼いならす 異文化を橋渡すフィールド研究の  
視座』せりか書房.

松田素二・古川彰, 2003, 「観光と環境の社会理論 新しいコミュニズムへ」古川彰・、  
松田素二編『観光と環境の社会学』新曜社.